

11 中心市街地は徳島の顔

●中心地は変遷する

徳島の政治や経済の中心地は、古代は朝廷の出先機関が置かれた徳島市国府町、中世では戦国大名が拠点とした藍住町勝瑞、近世からは蜂須賀家の居城である徳島城周辺へと、時代とともに変遷してきました。江戸時代に城下町であった徳島市は、当時の姿を大工町藍場浜、弓町、幟町といった多くの地名に残しています。

徳島城の築城と同時に多くの商人達も集められたのですが、まずお城に近い内町には、城に品物を納める御用商人が多く集まりました。城から見えて川向こうにも商売を行う店が集まり、新町となりました。新町や船場には大きな店が多く、藍場浜には藍大尽と言われた藍の豪商の白壁の藍倉倉庫群が立ち並んでいました。城の裏鬼門である南西の方角に位置する眉山の麓には、寺社が集まり寺町を形成しました。



●交通は水運から陸運へ

現代の輸送手段は自動車や鉄道などの陸運が中心であり、徳島を流れる河川の多さは時として交通渋滞を引き起こす要因となっています。しかし、自動車や鉄道などがなかった時代では輸送手段の中心は水運であり、水都である徳島市に人口が集積しました。

水運全盛期の吉野川では、大きな帆を張った全長16メートルの船が、薪、木炭、たばこ、藍玉などを、祖谷川口の川崎から池田へ迂回して半田へ脇町へ岩津へ川島へ第十堰を経て徳島市まで2～3日で運びました。逆に徳島市からは、塩、米、麦、雑貨などを積んでおよそ1週間を要しました。

那賀川はダムができる1951年まで、木頭地区などで伐採された木材の運搬に利用されていました。途中までは管流しといって1本ずつ流し、集積場でいかだに組み、下流の製材工場まで流していました。

昭和の初めごろまでは、徳島市街地と撫養（鳴門市撫養町）を結ぶ巡航船も運航されていました。新町橋畔から新町川を上り、吉野川を横切り、榎瀬江湖川から今切川を上り、旧吉野川へ撫養川へ鳴門文明橋畔に至るものです。

1895（明治28）年に日清戦争が終了した後、深刻な財政難に陥っていた政府は鉄道などの大型事業に民間の資本を導入しようと考えました。徳島でも藍商人の大串龍太



郎が県内の有力藍商人らに働きかけて、1896（明治29）年に徳島鉄道株式会社を設立しました。それから3年後の1899（明治32）年2月に徳島～鴨島（吉野川市鴨島町）間が開通し、その翌年には舟戸（吉野川市山川町）まで開通しました。そして、1907（明治40）年に国に買収された後、1914（大正3）年3月に阿波池田（三好市池田町）まで開通しました。

1913（大正2）年には徳島～小松島間が、1916（大正5）年には古川（徳島市応神町）～撫養間と中田（小松島市中田町）～古庄（阿南市羽ノ浦町）間がいずれも民営で開通し、1935（昭和10）年には高德線が国有として開通しています。

鉄道の開通とともに、藩政時代から明治期にかけて物資輸送の中心であった吉野川の水運は、その地位を鉄道に譲ることになりました。

●新町・内町地区の栄枯盛衰

大正時代に鉄道網の発達によって県内各地から徳島駅に人を運ぶ仕組みが整い、特に新町地区と内町地区は、戦前、西日本でも有数の商店街になっていました。しかし、第二次世界大戦末期の1945年7月4日、徳島大空襲によって徳島市の中心部はもとより、市街地の6割が一晩で焼け野原となりました。このときの被害は、死者約1千人、負傷者

約2千人、焼け出された被災者約7万人という大きなものでした。

こうした悲惨な出来事乗り越え、終戦後は驚異的な復興を遂げ、1950年代半ば～1970年代初頭の高度経済成長期には、新町地区周辺に多くの映画館が立ち並び、商店街を多くの人が行き交い買い物を楽しんでいました。

しかし、交通の主役は次第に鉄道からマイカーに移り、1980年代には広い駐車場を備えた郊外型大型店が相次いでオープンし、にぎわいに陰りが出てきました。1983年に徳島駅前を、1995年には同地区の顔とも言える地元資本の丸新百貨店が60年余りの歴史に終止符を打ち、ひとつの時代が終わりました。

2020年8月31日にそごう徳島店が閉店しました。アミコビル東館からそごう徳島店が撤退することによって、そごう徳島店と賃貸契約を結んでいたテナント・ブランドのうち残留するのはわずかとなりました。また、そごう撤退後のテナント誘致は現在のところ詳細は未定ですが、東館の2階半分程度と5階の一部に三越伊勢丹ホールディングスが出店を予定しています。アミコビル全体（西館、東館）では93テナント・ブランドがそごう撤退後も営業を続けることとなりますが、徳島市中心部の商業機能の低下は否めません。ゆめタウン徳島、イオンモール徳島などの郊外の大規模ショッピングセンター（SC）

の定着により、商業機能の集積地は新町・内町地区だけではなくなりました。さらにインターネットショッピングなどの店外での購買が一般的となる時代を迎えて、中心市街地は他地域とのすみ分けを図り、中心市街地ならではの役割が求められるようになってきています。

●中心市街地の役割とは何でしょうか

そもそも中心市街地とは何でしょうか。ひと言で表現すると「都市機能が集積して外から人が一番多く集まってくるところ」。具体的には、①公共交通のターミナル、②消費、娯楽の空間、③医療、文化、教育などのサービスを受けられる空間、④オフィス、⑤住居が組み合わさった空間で、歩いて回れる範囲を指します。

徳島市の中心市街地は、人が出会い、交流し、新しい文化を生む街としての求心力が残念ながら失われています。中心市街地のもつ交通条件の良さなどのメリットを生かし、人が集まり、人が主役となるような街への転換を急ぐ必要があります。

多くの人のニーズを反映させ、足りない機能を付け加えていくことが重要です。そのためには街全体をデザインしてマネジメントする仕組みが欠かせません。そこで、中心市街地活性化に取り組んでいる高松市中心部の丸亀町商店街の例を見てみましょう。



ここでは中心市街地の活性化について、「商店主の生活設計のためだけの事業であってはならない。商店街は公共性を意識してこそ存在価値がある」という考えで取り組みがスタートしました。

まちづくりを進めるうえでのネックは土地問題です。シャッターの降りた店を放置しようが駐車場にしようが、土地の所有者の自由です。そこで、丸亀町商店街は土地の所有権と使用権を分離させました。所有者は自分たちの資産である土地をまちづくり会社に提供し、まちづくり会社はその地域に必要なお店や施設を集積し、そこから得られる利益を所有者に地代として分配するという仕組みをつくりあげたのです。

これが実現したのは、地域に住む人たちの強い危機感と日ごろの連携、リーダーシップをもった人の存在があったからこそ。徳島も大いに参考にすべきでしょう。

郊外のSCを中心とする地域が中心市街地の機能を果たせばいいのではないかと、この意見もあります。SCは買物客のニーズに合った店を揃え、最近では消費だけでなく学びの場や子育て支援サービスも提供し、地元の人をたくさん雇用するなど、大きな役割を果たしています。しかし、SCだけでは全国どこにでもある特徴のない街になってしまいます。

中心市街地には住む人と訪れる人が共に長い歴史の中でつくりあげてきた「街並み」が

あります。徳島のアイデンティティ（存在意義）ともいえる徳島ならではの街並みが衰退することは、県全体の活力低下にもつながります。ですから、行政やそこに住む住民のみならず、市民・県民が自分たちの問題として主体的に関わり、中心市街地を再構築していくことが必要です。

そごう徳島店が閉店することに伴い、市民等の幅広い意見を聴くことを目的として徳島市が実施した「そごう徳島店閉店に伴う徳島駅前のみちづくりのあり方についてのアンケート調査（2019年11月～12月実施）」の結果を見ると、「徳島駅前にどんな施設があればいいと思いますか（複数選択）」に対して、回答者の約8割が百貨店・デパートを選び、さらに4割強が百貨店・デパート以外の商業施設を選んでいます。また、3割強の人が文化施設、2割が駐車場、1～2割の人が子育て支援施設、交通施設（鉄道施設、バス広場など）、健康増進施設、ベンチなどの休憩施設、公共施設（市役所窓口など）、駐輪場、宿泊施設を選んでいます。

そごう徳島店の閉店が発表された直後のアンケート調査だったので「百貨店・デパート」をあげる人が多いものの、多様な施設があがっている点は注目されます。市民が描く中心市街地には市街地の核となる商業施設が欠かせないことと、併せて文化施設、子育て支援施設、交通施設（鉄道施設、バス広場など）、健康増進施設といった市民サービスを

提供する施設も必要であると思われます。

徳島市では2019年6月に徳島駅周辺まちづくり計画を策定しています。これは徳島の玄関口にふさわしい拠点の形成に向けた方針や施策を定めたものです。これによると、中心市街地のまちづくりの基本方針は、「四国東部の中核都市にふさわしい都市機能を集積し、にぎわいを創出する」、「地域資源を身近に感じることが出来る都市景観と、人々が歩いて楽しみ、滞留や交流が生まれる居心地よい公共空間を創出する」などとされ、まちづくりの施策として、買回り品等を販売する商業施設、県内の食材を生かした個性ある飲食店、宿泊施設、医療施設、健康増進施設、文化施設、観光案内施設、伝統文化を伝える施設、住宅、子育て支援施設などの誘導、アートギャラリー、工房、イベント広場、シンボルアート・モニュメント、川の駅などの整備があげられています。

2020年9月の県議会で知事は、徳島市長からの要請を受けて、市文化センター跡地で計画している新ホールについて隣接する県青少年センターの土地活用も含め、県立の2千席の大ホールを核とした施設整備の検討に県市協調で着手すると述べ、さらに県青少年センターはそごう撤退後のアミコビルに移転させ、新たに移転整備する県青少年センターはそれまでの施設と異なり、ICTやアニメ、eスポーツなど、若者が集う魅力的な機能へ進化させる考えも示しました。中心市街地はそごう撤退により商業機能は低下し

ましたが、文化的な機能や若者を呼び込むにぎわい機能が新たに加わることとなります。

●心おどる水都徳島に

徳島市の中心部は、空から眺めると、川に囲まれた地域がひょうたんの形をしていることから、「ひょうたん島」の愛称で呼ばれています。徳島市は、面積の約13%を川が占めています。「ひょうたん島」の周囲の護岸は県産の青石できれいに整備されています。世界に誇れる水の都といっても過言ではないでしょう。

ところが、1980年代ごろまでは、新町川も決してきれいな川ではありませんでした。そこで「できる人が、できる時に、できることを」を基本に、「市民の汚した川は市民の手できれいに再生しよう」と立ち上がったのが、特定非営利活動法人新町川を守る会の理事長を務める中村英雄さんです。有志10人で会を発足し、毎月2回ボートで川の清掃を始めました。中村さんたちの活動を行政も後押しし、魚釣りができるほどきれいな川が復活したのです。

新町川を守る会は、ひょうたん島を約30分で1周する「ひょうたん島クルーズ」を無料（要保険料大人300円、小人150円）で運航していますが、今では徳島市の名物となり、年間の乗船者は5万人を超えています。そして、毎年夏に「吉野川フェスティバ

ル」や「屋形船と邦楽の夕べ」、秋には「観月演奏会」、冬には「川からサンタがやってくる」や「寒中水泳大会」など、川を生かすさまざまなイベントを開催し、さらには、新町地区と鳴門を結ぶ「撫養航路」を復活させるなど、川を楽しむライフスタイルを定着させてきました。

そのほかにも、助任川、田宮川、吉野川河川敷の清掃、花植え、そして、高知県の吉野川流域での植樹・間伐活動に加えて、川を共通項とした全国各地との連携などにも力を注いでいます。

「川を汚したのも人間なら、川を美しくするのにも人間。川は見られて美しくなる」というのが、中村さんの持論です。



ひょうたん島クルーズ